

SHUNKEN 2007-07 35-02



駿建

2007年夏期号 Vol.35 No.2 日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

教えてください！先輩達の仕事

建築を学んだ人が就く職業と聞いて、皆さんはどのようなイメージを持っていますか。世界で活躍する建築家？ 超高層建物の構造設計技術者？ それとも実際に建物を造る施工管理技術者？

知っている人も多いと思いますが、〈新卒社員のうち入社後3年以内に辞める人〉は3人に1人といった統計結果があります。その理由のほとんどがミスマッチといわれています。就職ミスマッチの原因としては、イメージ先行や情報不足による就職前後のギャップ、事前に職業の実情に触れることが少ない構造的問題などが挙げられます。

そこで、本特集では、少しでも早くから皆さんに建築

に関わる実際の具体的な仕事を知ってもらうため、本建築学科・大学院建築学専攻を卒業した先輩たちに、仕事の実情を紹介してもらいました。なるべく多くの職種にまたがるように、11の異なる分野で活躍する先輩たちにお願しました。

皆さんへの紹介に当たっては、まず、執筆者本人が所属する分野の仕事が世間一般的にどのようなイメージを持たれているかという視点から、ご自身の考えで書いてもらいました。次に、うれしさ、楽しさ、自慢、つらさ、失敗談など、その仕事でしか経験できないであろうことを具体的に執筆してもらいました。

(酒匂教明・助手)

建設業・設計

インハウスアーキテクトとして —プロフェッショナル集団の中で—

井川博英

学生の皆さんこんにちは。私は清水建設に入社し、以来設計本部で建築設計に携わっています。著名な建築家とは異なり、建設会社のインハウスの設計者はなかなか皆さんにはイメージしにくい存在かも知れませんね。デザインにも制約が多かったり、自分のデザインを表現しにくいのではといったイメージもあるかも知れません。

私自身、就職先を探す際、アトリエ、組織事務所、ゼネコン設計部、どれにしようか随分迷いました。結果を一言で表せば、その選択は間違っていなかった、ということです。それは自分のデザインを実現するための専門家が社内には必ずいる、ということに尽きます。音や風の専門家、ビオトープの専門家、太陽光発電の専門家……、廻りにはそういう人たちが大勢いて、やろうと思えば何でもできます。ただその「何でも」がポイントで、それには日頃からアイデアを温め、実際のプロジェクトで実現するための準備と、実現までに直面する数々の壁を打ち破るための提案力や実行力が不可欠だからです。私はその礎を学生時代に培ったと考えています。学生時代にはたくさんのコンペに応募しました。その都度課題に向

き合いアイデアやコンセプトを仲間と議論し形にする。当時のコンセプトを形にしていく行為の延長に今の設計行為があると感じています。ただ学生時代とは異なり、実際のプロジェクトではそのプレッシャーと作品竣工時の喜びは比べようありません。

最後に、私は学生時代にコンペで苦勞して賞を勝ち取った経験から、遊びの楽しさより、苦勞して勝ち取った喜びの方が遥かに大きく自分のためになることを学びました。短い学生生活で思い切り努力し、可能な限り納得の行く所に就職し、一旦就職したら最低5年はそこで頑張り実力を磨く、これが皆さんへのアドバイスです。頑張ってください！

(いかわひろひで)

略歴

1992年	博士前期課程建築学専攻修了(若色研究室)
1992年	清水建設㈱入社
2006年～	同社設計本部設計長



プレミアガーデン本郷

太田裕司

「省エネで地球を救う」をモットーに入社して以来早や5年が過ぎました。入社して間もないころは、施主との打合せに出席しても専門用語がサッパリ判らず議事録すら書けなかったのを覚えています。最近では物件を一人で担当させてもらえるようになりましたが、建築設備という分野は電気、上下水道、空調などから最新のエネルギー管理システムまで非常に幅広い上に、突き詰めようと思うと奥深い分野なので日々勉強の毎日です。

建築設備というと、ずいぶん昔は付帯設備などといわれ、既存の建築に後からくっつける程度のものとしか考えられなかった時代もあったようですが、最近では環境問題やCO₂削減などの流れの中で、電気、ガス、水道などの省エネルギーに対する要求が増え、建築設備の重要度が増しています。しかし、設備システムがいくら高性能でも建築的に断熱性が悪かったり、非効率なプランだったら何の意味もありません。計算や技術的根拠を検証し、環境性能の高い建築を計画する手伝いをするのも設備設計者の仕事です。そういう意味では、建築の企画段階からはじまり、運用後のランニングコストや維持管理までトータルな視点で計画する必要があり、大変ではありますがやりがいもあります。

省エネルギー関係の企画提案で最近担当した工場建替計画ではCO₂排出量を約25%削減するような提案を求められ、外気冷房やクールトレンチ、タワー型蓄熱槽、雪冷房システムなどいろいろな省エネ提案を行いました。省エネ効果を計算するのが一苦勞で、建物の運用エネルギーを想定し、その省エネ項目の効果をひたすら計算し、提案書をまとめました。苦勞した甲斐あって受注することができましたが、やはり、コンペに勝った時と建物が竣工した時の達成感は何ものにも変えがたいものがあります。

(おおたゆうじ)

略歴

2002年 博士前期課程建築学専攻修了(環境情報研究室)
2002年 戸田建設(株)入社(横浜支店建築部設備課)
2004年～ 同社建築設計統括部設備設計部



KINSIA

大木宏幸

私は1994年の春、フジタに入社して以来13年間施工管理技術者(現場監督)として、建築工事現場で働いてきた。施工管理という仕事のイメージは、“拘束時間が長く厳しい”ということがあがると思う。確かに工期という締切があるため、忙しい時期があることは否めないが、その苦勞に変わる“やりがい”はある仕事といえる。入社して数年を振り返ると上司、専門業者の間に位置して、いきなり中間管理職の様な立場で仕事をしなければならぬため、まだ建物づくりを知らない状況で苦勞も多かった。特に仕事における自分の存在価値が見出せず、悩む時期があった(今考えるとその当時の自分も役割を果たしていたと思うが)。

しかし、徐々にさまざまな仕事を覚え、上司、専門業者と意見を交えつつ建物づくりができるようになり、さらに建築主・設計などの事業に携わるさまざまな人たちと対等に話ができる様になって、自分の想いが建物に反映されていく。その頃から自分の存在意義、またこの仕事の面白味を感じ、“やりがい”を感じるようになった。また、建物は、社内の人間はもちろん、専門業者、設計、建築主などのたくさんの人たちの力により完成するので、ある種の混合チームのような感覚もあり、建物完成時には同じ喜びを分かち合えるという“やりがい”もある。建築現場の工期は1～3年と短いため、新しい現場が始まるたびに、新しい人たちとの出会い、新しい建物に新鮮な気持ちで取り組めるという点も魅力の一つであろう。

最後に、施工管理業務という仕事は、確かに苦勞が多くこれから改善すべき点が多々あると思う。しかしながら、苦勞が多い分、喜びや達成感もまた、多く感じられる仕事であるといえるだろう。これからも、私は“やりがい”のある仕事を続けていきたいと思う。

(おおきひろゆき)

略歴

1994年 建築学科卒業(岸谷研究室)
1994年 (株)フジタ入社(広島支店建築部)
1998年～ 同社東京支店建築部



成田空港第1旅客ターミナルビル第5サテライト新築工事

下村修一

私は入社以来4年間、ゼネコンの技術研究所で地盤基礎に関わる業務をしています。「ゼネコンの研究開発は、技術の最前線であり、ゼネコンの中核だ！」なんて、生意気？ ひとりよがり？ なことを思っていた私は、入社してから現実とのギャップを認識していきました。

ゼネコンの主役は現場です。当前ですが、現場が稼がなきゃ、研究開発費はないわけです。もっと言うと、現場や設計との繋がりがあってこそ良い研究開発ができます。ゼネコンの研究開発は、最終的に現場や設計も含めた全社で取り組み商品化を目指します。商品化には現場での実験・計測が必要であり、室内レベルの実験と比べて格段に難しくなります。また、現場の工程や各部署間の連携など、人間関係にも苦労します。同じ会社において部署が違っただけでこんなにも考えが違うのかと驚くことがあります。しかし、苦労の末に完成した商品が現場に使われ、適用物件が増えることはこの上ない喜びです。これが自分で命名した商品だったら、喜びは倍増でしょう。

ゼネコンの研究者は技術支援も重要な仕事のひとつです。建物は一品生産のため、各建物に課題があります。研究者は最新の技術情報やこれまでの経験を基に課題を解決していきます。現場や設計の技術者はコンクリートや鉄骨に比べてあまり地盤基礎に関する知識がありません。入社間もない若造でも重宝されます。これはかなり気分のいいことです。その反面、技術支援に追われる日々を送っていると本質である研究開発を忘れてしまいがちです。しかし、設計や現場での課題は研究開発にとってニーズの宝庫です。このチャンスをどのように生かすかが研究者の資質であると感じます。これまでを振り返ると複数の現場支援や研究開発に携わり、いろいろなことを経験できたと思います。ゼネコンにいてこれほど多くの経験ができる部署はないでしょう。学術的なことに深く入りたい気持ちを満たせないことや、自分の成長を実感できない日々もありますが、いつかスペシャリストになる日を夢見る今日この頃です。(しもむらしゅういち)

略歴

2003年 博士前期課程建築学専攻修了(安達研究室)
2003年 鹿島建設(株)入社(技術研究所・建築構造グループ・地盤基礎チーム)



研究所で開発し、活用されている地盤調査車

伊原由起

「似たような家」・「過度に装飾している家」・「大衆を想定した家」

建築学科で熱く建築を学んでいる最中の人ならば、あまり肯定的な印象は「ハウスメーカー」に対して、抱いてはいないのではないのでしょうか。

私も「家」を商品として捉え、大量生産しているハウスメーカーに違和感を抱きつつも入社しました。その理由は、自分が建築学生でなかった場合、一番初めに「家づくり」と聞いて思い浮かべるのが「ハウスメーカー」であり、そこで実際どのような考えのもと「家づくり」が行われているのか知りたかったこと。世の中に少なからず影響を与える「ハウスメーカー」の実態を知り、そこで設計業務を試みたかったこと。建築雑誌に載っている「家」にも少し違和感を持っていたこと。と、まあいろいろありました。

実際、入社すると企業ではやはり分業です。「設計専任職」という職種で採用されたものの、実際従事したのは「見積」という作業です。学生時代、金額のटनाなど微塵も考えたことのない私にとって、「謎」の世界でした。下地材から工賃、棚板1枚、電気スイッチ1つ1つすべて図面を見ながら拾っていく作業です。「『見積』ってなんだ？」次から次へとやってくる図面をゆっくり見る間もなく、「ここに窓があるべきなのか？」「周辺敷地は？」など、たくさんの疑問が常に頭にありました。

しかし、何故か6年も経つとハウスメーカーの家でも、建築家の家でも、そこに住む人自身がしっかりしていれば、どこでも良いのだと思うようになりました。「見積」という仕事を通し、現実には確固と存在する「1万円の厳しさ」を知ったこと。その中で、建築ができることを考えさせられたこと。が、理由でしょうか。

吉村順三さんに関するトークイベントで、「建築ができることは、構造・通風・採光・回遊性のあるプラン・絵を飾ったりできる壁だ」というのが、耳に残っています。(若干あやふやですが……) その家がその人らしい家であるかどうかは、最終的にはそこに住まう家族・訪れる人によって空気が形作られると思います。最低限、建築にできることは、耳に残った言葉の部分であり、それはどこであれ、皆可能なのだと思います。このことに気づいた今では、設計業務であっても見積業務であっても、「家づくり」の仕事に携わっていることをうれしく思っています。

(いはらゆき)

略歴

2002年 建築学科卒業(高宮研究室)
2002年～ 三井ホーム(株)入社(東京西支店設計センター)

何故、建築を専攻した人が外資系証券会社に在籍しているのか、と不思議に感じる方も多いと思います。実は建築と証券会社には大きな関わりがあります。

不動産証券化という言葉は新聞などでよく目にしますが、現在私が所属しているモルガン・スタンレー証券株式会社証券化商品部では、ノンリコースローン（個人や会社の信用力や資産ではなく、融資対象不動産のみの収益力を評価して実行する融資）を束ねてCMBS（商業用不動産担保証券）を組成し、世界中の投資家に販売する業務を行なっています。

投資家保護の観点から、ローン担保不動産に違法な建築、土壤汚染やアスベストの使用などがないかを各種レポートを使いながら確認し、問題があれば適切な対応をしています。

最近では、耐震強度の不足や違法建築に関する社会的な関心がとても強く、物件のデュー・デリジェンス業務の重要度がますます高くなっています。

ローンを裏づけとした証券化商品を組成する過程において、投資家の方々が購入を検討しやすい商品に仕上げ、それが無事販売されていくときが大きな喜びとなります。このあたりは建築技術者でいうならば、ずっと関わってきた建物が、いくつもの課題を乗り越えた末、無事竣工し、クライアントに引渡しを行なうときの感覚に似ているのかもしれません。

また、グローバルな会社ならではの、規模の大きい案件に携わることができることは大変な魅力です。日経新聞の見出しに掲載されるような、社会的にも注目を浴びるプロジェクトに関わる機会も珍しくありません。

また、業務内容のみならず、魅力ある人々が沢山揃っています。金融機関はもちろんのこと、デベロッパー、商社、不動産鑑定事務所、法律事務所出身者など多くのプロフェッショナルが集まっており、彼らと毎日仕事ができることも、とてもプラスです。

誰もが高いモチベーションを持って、それぞれの英知を結集しながら業務に取り組んでおり、とても刺激的な毎日を過ごしています。

（そうまだいすけ）

略歴

1993年 建築学科卒業（柳田研究室）
1993～2006年 大成建設㈱（情報企画部、リニューアル部）
2006年～ モルガン・スタンレー証券㈱（証券化商品部）

「雑誌に出ているようなステキな建築をつくる」意匠設計とは、世間では具体的な過程が見えないので、そのようなモノヅクリの表面的・部分的な華やかなイメージを持たれているのではないのでしょうか。

しかし、設計事務所の設計部は、部分的なデザインだけではなく、プロジェクトをデザインし、マネジメントします。まず建築主窓口となりプロジェクトの舵をとります。スケジュール管理にはじまり、関係スタッフ打合せ、外注・メーカー調整、コンセプトワークやデザインのみならず、多くの法規制チェックと協議、性能・品質確保のための技術的検討、コスト調整、現場の設計監理など、限られた時間の中で求められる業務は多岐にわたり、それらすべてをまとめていくことがデザインとなります。

学生時代と異なることは、すべてに相手があること。沢山の人が携わってモノヅクリが成り立っていること。コストが生じること。すべきことの多くはタイトスケジュールであること。また、自分の良いと思うことが相手にとって必ずしも良いことではないこと。

そうした状況の中で、自我の押し付けではなく相手を納得させることの連続です。検討に基づく理論武装、相手にメリットとなるストーリーづくり、分かりやすい表現への置換、あの手この手を使います。その中に自分の思うことを盛り込ませ、結果として自分の思う建築に近づけるよう、プロジェクトを推進していきます。

すべきこと・時間・心身のバランスが不安定になることもあり、とてもハードな職種です。しかし、建築主やエンドユーザーなど「誰か」に喜んでいただける魅力的なジャンルです。「誰か」にいただく喜びや感謝のひと言は、苦労や努力を、深い感銘への過程に変えてくれます。

机上の知識を知恵に変えて、ゆたかな工夫とアイデアを、あせらずにカタチにしてください。

（なかむらとしこ）

略歴

1998年 博士前期課程建築学専攻修了（若色研究室）
1998年 ㈱安井建築設計事務所入社（設計部）



某大学学生寮

大塚眞吾

一昨年の耐震偽装問題で世間一般にクローズアップされた構造設計という分野ですが、正しい仕事内容はあまり理解されておらず構造設計者として寂しく感じています。メディアから伝えられる内容は、「建築家から与えられた建物をプログラムに入力し、答えがすべて“OK”になるまで計算しそれを図面化して終わり。」これは構造設計のほんの一部でしかなく、これらの作業以前に大半は終了していると考えます。私の場合建築物を設計するにあたっては、最初に規模や予算など条件の洗い出しの際に構造種別や構造形式を建築家と一緒に考えています。特に架構システムは建築物全体のイメージや空間構成を大きく左右するため重要です。この架構システムの決定で構造設計の大部分は終わるといっても過言ではありません。構造計算は、決定した架構システムが自重や地震力などの荷重を想定したとおりに地盤に伝達できているかを確認するためのものでしかないのです。

今年初めに稼働を始めた再春館製菓所「つむぎ商館」は、4,500㎡の事務室空間を1フロアに集約した建物ですが、その事務室空間の架構システムは屋根を3本の樹木状柱で支える樹木構造を採用しました。設計条件から初期段階で樹木構造を念頭に置き設計を進め、途中設計変更などがあり苦労しましたが、完成したものはそれなりに満足できるものでした。個人事務所である構造設計事務所がこのような事例ばかりを設計しているかといえそうではなく、大多数は小規模の建築物です。ではやりがいがないかといえそんなことはなく、小さい物件でも自ら楽しみを作って仕事をするようにしています。そして設計したものが実際に建設された時、設計者としての自負を実感できるのです。構造設計は、自分で考えたものが実現する“ものづくり”の楽しさがあるのです。（おおつかしんご）

略歴

1984年 建築学科卒業(斎藤研究室)
1990～97年 構造計画プラスワン
1997年 大塚建築構造設計室設立



事務室空間と樹木構造

小林文子

“スタイリッシュ”，インテリアデザイナーというそのようなイメージを持たれるでしょうか？TVや情報誌で、取り上げられているそんな影響か、華やかな「あこがれ」をもって入社する人がたくさんいます。

内装設計のフィールドは、既に創り上げられた空間、さらに区切られた小さな場所になります。そして建築の最終仕上げであり、利用者に最も近い位置にあります。そのような場所であるからこそ、諸条件による建築工事の遅れを取り戻すべく、さらにはクライアントの理想を叶えるべく、スケジュールは過密かつ過酷なものになります。それ故に1分1秒が大切に、また、仕上がった空間は日常ですから、細部までこだわります。

私は現在、百貨店内のショップを中心に活動しています。改装のシーズンには担当が何店舗も重なるため、夜間の現場や図面作業、全国各地での商談、打ち合わせなど、昼夜を問わず行うことになります。過ぎては迫る時間、スケジュールに追われる毎日。さらに、埃に塗れ、地ベタを這い、脚立にのぼり……（個人差はあります）。

そんな中でも、最後に「いいお店ができた」とクライアントからいわれたときは本当にうれしく思います。しかし、どんなにいい店舗でも、流行や時間が経過すれば取り壊されます。短いもので1年半長いものは10年以上。現在の会社に勤務して5年目を迎え、約60店舗以上の担当をしましたが、設計した店舗が初めて取り壊されたときには、とても寂しい思いをしました。

インテリアデザイナーに要求されることは、空間の可能性を最大限に引き出すこと、希望を具現化することであり、さらに、コミュニケーション力、迅速な判断力、決断力が必要だと感じています。

「あこがれ」なくこの業界に入る人は少ないと思いますが、若干ガテン系かもしれません。

（こばやしあやこ）

略歴

1999年 博士前期課程建築学専攻修了
（建築史建築論研究室）
1999～2002年 ㈱RDD.inc
2002年 ㈱ア・ファクトリー入社



仙台フォーラス
ケンジイトウ
コムサ コレクション

皆さんは、建設業界の「メーカー」と聞いてどのようなイメージを持ちますか？一言で表現するのは困難ですが、私は、（ある特定分野における）「ものづくり」の専門家集団という表現ができると思います。

太陽工業は、建築分野では、テント（膜構造）やシステムトラスの設計・製造・施工を手がけている会社です。その中で、私は膜構造の設計部隊に所属しています。膜構造というとドームやスタジアムの屋根といった華やかなイメージがありますが、そのような派手なものから小さな庇テントまで、扱っている製品は多岐にわたります。

さて、最近の印象深いプロジェクトを2つ紹介します。まず、東急東横線元住吉駅。ここ半年程で東急線各駅のホーム上家に次々と出現している膜屋根のうち、最初に竣工した物件です。次に、大宮公園サッカー場。大宮アルディージャのホームグラウンドで、日大の斎藤先生が考案された「ばねストラット」が採用されており、学びながらの設計協力という貴重な体験ができました。

両者ともほとんど実績がなかったこともあり、設計事務所や元請の方々と意匠・構造・施工を問わず、納得いくまで打ち合わせを持ちました。また、設計段階から膜の工事担当者やケーブルメーカーの先輩方を巻き込み、新規ディテールの開発も行いました。膜工事が始まってからは、何度も現場に足を運んで、工事部隊と一緒に泥だらけになりながら施工を行いました。その結果、どちらも膜らしいダイナミックな屋根に仕上がっています。

この2つのプロジェクトでは、設計者の「こだわり」に対して本気で向き合えたこと、加えて、設計から施工まで一貫して関わられたこと自体がしあわせでした。

このように、テントという専門のフィールドで、設計者・施工者の方々と、また、自分の仲間である工事・製造部隊と、皆で一緒になって、同じ目標に向かって、より深く「ものづくり」に参加できることが、今、私の仕事のやりがいとなっています。（いのうえゆうこ）

略歴

2001年 博士前期課程建築学専攻修了（斎藤研究室）

2001年 太陽工業(株)入社



東急東横線元住吉駅
竣工後に現場に足を運ぶのも楽しみのひとつです

公務員は、最近のマスコミなどによる調査において職業としての安定性などから人気の職種として取り上げられることもあります。しかし、学生の皆さんには、公務員は定時出勤に定時帰宅、仕事の内容はお堅く画一的などとあまり魅力を感じない職業と考える人も多いのではないのでしょうか。

確かにそんな職場もあるかもしれませんが、私が川崎市役所に入庁して6年余り、まだまだ経験は浅いながらも日々、川崎市の建築行政にやりがいを感じながら仕事に打ち込んでいます。その一部を皆さんにご紹介します。私が川崎市役所に入庁し、まず配属されたのは、まちづくり局指導部建築指導課という部署でした。いかにも建築行政というイメージを感じてと思いますが、その中で私が担当したのは、地区計画という都市計画的なカラーの強い地域計画を策定する仕事でした。大学では建築計画を専攻していた私にとってこの仕事はとても新鮮なものでした。

地区計画とは、建築物単体の計画をするのではなく、一定の区域における建築計画の制限や建築行為の誘導を図り、地域が目指すより良いまちづくりを目指すというものです。

この地区計画を策定することで数十ヘクタールという広大な地域のまちづくりが自分の策定した計画に基づいて進められていくのです。しかし、この計画は行政の独り善がりであってはならないのです。そこに住む住民の快適な生活環境が形成されなければ意味がありません。

そこで私は、計画区域に何度も足を運び地元の地形や環境を調査したり、近隣住民の意見を聞くため休日に町内会に伺ったりしたこともありました。しかし、住民の意見というものは必ずしも皆同じではないため、やっとの思いで計画案を作成しても批判を浴びてしまうこともありました。そんなやり取りを繰り返し、最終的に地区計画を決定できたときは非常に達成感を感じることがができます。現在、百ヘクタール以上の区域で、それらの私が携わった地区計画に基づいてまちづくりが進んでいます。

このような大きな仕事ができることが公務員の魅力だと思います。ほかにも建築行政でなければできない大きな仕事がたくさんあります。学生の皆さんが「公務員」というものに興味を持ち、また、意欲をもって入庁してくれることを期待しています。（たまきまさひろ）

略歴

2001年 博士前期課程建築学専攻修了（若色研究室）

2001年 川崎市役所入庁

明るくない／白くない／四角くない／ 閉ざされていない展示室

海外出張報告 1

佐藤 慎也

前回の報告（2007年1月号）では滞在先のZKMでの活動を紹介しました。その最後に「マインドフレーム（MindFrames）」展について少し触れましたが、今回はその続きです。この展覧会は、メディアアートの大御所であるステイナ+ウッディ・ヴァスルカ夫妻を中心として、ニューヨーク州立大学バッファロー校メディアスタディで活動した人たちを紹介するものでした。参加アーティストはヴァスルカ夫妻、現在はZKMの館長であるペーター・ヴァイベル、メディアスタディのディレクターであったジェラルド・オグレディ、映像作家のホリス・フランプトン、ポール・シャリッツ、ジェームス・ブルー、トニー・コンラッドの8人。アーティスト・イン・レジデンスとしてZKMに滞在していたヴァスルカ夫妻とのコラボレーションにより、展覧会の中心として使われたラボラトリーと呼ばれる展示室をデザインしました。

また、ZKMでの活動と平行して、同時代のアートにふさわしい展示空間がどのようなものであるべきかを考えるため、ドイツ国内や近隣諸国の美術館を視察しました。その数は優に100館を超えています。そこで、マインドフレーム展を紹介する前に、その中で気になった展示室を持つ美術館をいくつか紹介したいと思います。

●明るくないこと

美術館の展示室には明るさが必要とされてきました。特にヨーロッパの美術館では、作品の劣化を恐れるよりも、適切な環境で作品を鑑賞する場を提供することを優先し、自然光を採り入れた展示室が多くつくられてきま

した。ところが最近の現代美術では、映像を用いた作品が非常に増えてきています。これまでの展示室では適切な明るさの確保が重要な役割でしたが、映像、しかもプロジェクタを用いた作品のためには、反対に暗さが必要とされています。技術の進歩により輝度の高い機器が手に入り、明るい場所でも映写が可能になってきましたが、それでもアーティストたちは、より鮮明に映像を映し出すためにさらに真っ暗な部屋を要求してきます。

ベルリンの「ハンプルガー・バーンホフ現代美術館」は、駅舎を改修した本館の背後に、長大な倉庫を改修した増築棟を持っています。そこで映像作品を集めた大規模な展覧会が行われており、窓がなく、天井もむき出しの巨大な暗い空間が、結果的に魅力的な展示室として使われていました。しかし、ほとんどの美術館では、トップライトや窓を塞いだり、照明を落とすといった対応をすることで、本来は明るい展示室を暗くして使っていました。

●白くないこと

パリの「ルーブル美術館」や「ウィーン美術史博物館」といった歴史のある美術館では、古典的な絵画のために色味のある壁面を持った展示室がつくられてきました。その後、抽象的な展示空間が求められた結果、ホワイトキューブと呼ばれる真っ白な展示室が多勢を占めるようになります。しかし、いくつかの美術館では、あえて白くない展示空間をつくり出す試みが見られています。

「シュトゥットガルト・ヴェルデンベルク・クンストフェライン」では、白→グレー→黒と移り変わる展示室



バーゼル現代美術館



ハンプルガー・バーンホフ現代美術館



ポンピドゥー・センター



ニューヨーク近代美術館(MoMA)

の壁に作品が描かれ、「グラーツ州立美術館」では、床まで黒い展示室に大量の絵画が展示されていました。中でもパリの「ポンピドゥー・センター」では、映画を切り口に膨大なコレクションを並べ替えた展覧会を行っており、広大な空間を細かく分けた展示室の壁が、やはり白から黒へのグラデーションにより塗り分けられていました。過去の展示室の壁面のように鮮やかな色彩を持っているわけではありませんが、必ずしも白い展示室だけが美術を展示する場所にふさわしいわけではないことを、これらの展覧会が示していました。むしろ、展示内容に応じて自由に壁の色を塗り替えることができる、そんな融通の利く展示室が、同時代のアートにはふさわしいのかもしれません。

●四角くないこと

ホワイトキューブと呼ぶべき、長方形の平面形状を持った四角い展示室がいくつも連結する美術館では、時として、その空間体験が単調に思われることがありました。それに対し、展示室の形によってホワイトキューブを逸脱する試みも現れています。

昨年オープンしたルクセンブルクの「ジャン大公近代美術館」では、中世の要塞跡に建つというコンテクストを持つため、展示室の平面形状は菱形や八角形であり、ほとんどが直方体ではありませんでした。「バーゼル現代美術館」では、最上階の最も大きな展示室がU字型の平面形状を持っていました。これらは単なる四角い展示室には持ち得ないユニークな展示空間を生み出していて、非常におもしろいものでした。ほかにも、個人的には最高の美術館と考えている「フランクフルト近代美術館」では、三角形の敷地形状により生み出された四角くない展示室が積層され、魅力的な展示空間がつくられています。もちろん、これらは敷地の制限により偶然に選択された形であるのかもしれませんが、これからの展示空間の1つの方向性を示しているのではないのでしょうか。

●閉じていないこと

ホワイトキューブの発祥の地と言われる「ニューヨー

ク近代美術館 (MoMA)」にも立ち寄りました。ここではホワイトキューブの展示室をつくり出しながらも、マンハッタンに位置する美術館であることを内部からも知覚できるように大きな窓が開けられ、周りの街並みと作品を同時に見ることができました。一方で、「リヒテンシュタイン美術館」では、展示室の一面がガラス張りになっており、ショーウィンドウのように街から展示室内を見ることができました。

内部から外部を取り巻く環境を把握することができたり、反対に外部から展示室を覗き込むことができるような関係は、閉ざされたホワイトキューブが目指した抽象的な展示空間とは異なって、開放的な性格を持っています。今まで作品の鑑賞には邪魔だと考えられていた外部との関係を、むしろ積極的に取り結ぶことで、新たな展示空間を提案しています。

●マインドフレーム

さて、「マインドフレーム」展に話を戻します。ここでヴァスルカ氏から要求されたことは、単なるボックスのような展示室をつくりたくないということでした。ほとんどが映像作品であるため、会場内は全体に暗くする必要がありました。メインの展示室となるラボラトリーは、台形平面の四角くない部屋であり、美術館自体の列柱を取り込みながら、楕円形状に8室が配置されています。そして、映写される映像が内部からも外部からも見えるように、スクリーンとなる半透明な窓を設けました。さらに、わずかなアーチを頭頂部に加え、壁の先端に緩い勾配を付けることで、少ない形態操作によって通常の展示壁面とは異なる外観を与えると同時に、すべての壁面をグレーで塗りました。こうして、ヨーロッパで訪れた美術館の体験を反映させることで、これまでの美術館とは異なる展示室をつくり出すことを目指したのです。

世界的なアーティストとのコラボレーションをはじめとする1年間の体験は、非常に有意義なものでした。あらためて最後に、今回の日本大学海外派遣研究員という貴重な機会を与えてくださった関係各位に感謝の意を表します。
(さとうしんや・助教)



「マインドフレーム」展



ラボラトリー内部



ステイナ・ヴァスルカと筆者

至高の響きの聴き比べ

海外出張報告 2

羽入敏樹



ボストンシンフォニーホール

私の主な研究分野は、音楽ホールやオペラハウス、ライブハウス、スタジオなどの音環境を取り扱う“室内音響”です。最近では室内だけでなく屋外演奏空間のための新しい音響設計手法についても研究を進めています。今回の海外派遣は、海外の音楽ホールや屋外演奏会場の調査と音響分野で著名な研究所の訪問が主な目的でした。派遣期間は平成 18 年 9 月 19 日～10 月 15 日です。

●音楽ホールおよび屋外演奏空間

音楽ホールの響きはホールの室形状、壁面のディテールや材料によって変わります。つまり建築設計が音楽の響きを左右するのです。特に私は音を聴いて人がどの様に感じるかという“心理評価”に興味がありますので、今回、以下に示した欧米の音楽ホールやオペラハウスを聴き比べました。ただ聴くだけでなく、ホールの内装材や楽屋、天井裏などのホールに付随する建築空間の調査も併せて実施しました。また、ボストン交響楽団の夏の屋外コンサート会場として有名なタングルウッド野外音楽堂も視察しました。

1. コンセルトヘボウ（アムステルダム）
2. ムジークフェラインザール（ウィーン）
3. ボストンシンフォニーホール（ボストン）
4. プラームスザール（ウィーン）
5. ウィーン国立歌劇場（ウィーン）
6. オタワアートセンター（オタワ）
7. ジョーダンホール（ボストン）
8. タングルウッド野外音楽堂（ボストン郊外）

上にあげた中でも特に、1～3のホールはその音響の良さから世界 3 大ホールと評されています。この 3 ホールを徹底的に聴き比べることが今回の海外派遣の主な目的の一つでした。一般的に実際のホールの音響を聴き比べることは簡単ではありません。まず、ホールの音の印象は時間とともに薄れていきます。比較するなら音の印象が薄れないごく短期間の内にすべてのホールを聴き比べる必要があります。地理的に離れた世界のホールを短期間に聴き比べることは尚更簡単なことではありません。また、ホールの音響は座席によって異なります。で

すから、一つの座席で聴いた音をそのホールの代表的な音と捉えることはできないのです。さらには、演目によってもそのホールの印象は変わるでしょう。したがって、巷でよく聞かれる“A ホールより B ホールの音が優れている”という類の話は実はとても曖昧なものなのです。

そこで今回、約 3 週間という短期間にコンセルトヘボウで 7 回、ムジークフェラインザールで 6 回、ボストンシンフォニーでは 8 回のコンサートを聴きました。一階席前方と後方、バルコニーの前方と後方など、なるべくホールのすべてのエリアで座席を予約しました。昼夜 2 回公演がある時は必ず連続で聴きました。これは昼の音の印象が薄れない数時間後に別の座席で聴くことができるからです。また、まったく同じオーケストラと演目のコンサートを何回か続けて聴きました。

この 3 ホールはすべて平面、断面ともに長方形のシューボックス型ホールです。日本でもこれら音響の良いホールに倣ってシューボックスホールが多く建設されました。しかし、3 ホールの音は日本のシューボックスホールとはまるで違っていました。普通は一階席の前方では響きが物足りなく感じるものですが、3 ホールでは前方の座席でも十分な響きを感じました。それどころか、むしろ後方席より響きに存在感があるのです。

ボストンシンフォニーホールで、私は運良く昼間のリハーサルを聴くことができました。前日の晩、私はその演目のコンサートを聴いたばかりでしたし、当日の夜にも同じ演目でコンサートを聴くことになっていました。これはオープンリハーサルといって、本来は主に音楽家を志している学生向けに開放されているものです。私は音響の研究のためにはるばる日本から来たのだとホールの受付に図々しく交渉して入れてもらうことができました。海外では情熱を持って図々しくやると何とかなるものです。リハーサル中、ホールのあらゆる座席に移動しながら音響を比較しました。ちなみに、リハーサルですから楽団員は皆ジーパンなどラフな服装です。しかし、演奏が始まるととてもリハーサルとは思えないほどの集中力ですごい演奏をします。こちらも演奏中は聴き惚れて移動できません。演奏が中断しているわずかな隙を見

てサッと移動するわけです。そのようにして一階席を前方から後方に、右に左に移動しました。一階席では、音が上から降ってくるような立体的な響きでした。素晴らしい。そして2階に上がり中央バルコニーで聴きました。まろやかにブレンドされた柔らかな響きに変わりました。これもまた素晴らしい響きです。そして、2階上手側バルコニーを後方から前方に徐々に移動しました。あれあれ!? 何か違うぞ! さらに上手バルコニーの前から3分の1くらいの座席に移動した途端、突如雷に打られました。全身がびりびり痺れ、鳥肌が立ち、全身の毛穴から汗が吹き出し、髪の毛は逆立ちました。これぞ奇跡の響きか!! 大げさではなく、とてつもなく美しい響きに出会いました。単に“素晴らしい”という形容ではとても表せない感動でした。日本のシューボックスホールでは出会ったことのない響き、この響きを生み出している秘密は何なのだろうか、絶対に解き明かしたい、つくってみたい、と強く思いました。

その晩、リハーサルでやっていた曲の本番を聴きました。座席は一階席のほぼ中央です。曲はシェーンベルクの前衛的な曲「ピアノコンチェルト 42 番」とベートーベンの「ピアノコンチェルト第4 番」でした。昨日と同じボストン交響楽団で同じ曲のはずなのですが、演奏と音がまるで違って聴こえました。昨日も良かったのですが、今日はオーケストラとピアノ演奏のダニエル・バレンボインがとても集中しているのが伝わってきました。終わると聴衆は総立ちでスタンディングオベーションでした。

隣の老婦人が夫と思われる老人に今の演奏を熱く語っているのを、私は思わず“このホールに何回来たことがありますか?”と質問しました。しかしこれは愚問でした。“回数はわからないほど、30 年間通っているのよ”との回答。その老婦人は若い頃ピアノの教師をしていて、教え子がボストン交響楽団に何人も入って演奏しているのだそうです。どうりでピアノ演奏に造詣が深いわけです。最後に私が“このホールでどの席が一番いい音ですか?”と聞くと、“2 階バルコニー席の前の方”と実際にその席を指さして即座に答えたのにはびっくりしまし

た。なぜならその席は私が昼間、オープンリハーサルで移動しながら聴いて見つけた“奇跡の響き”の座席そのものだったからです。

私は今回の派遣で聴いた素晴らしい響きについて、これまでの音響理論には足りない何かがあると考え、新しい仮説を立てて現在研究中です。

●音響研究所の訪問

音響研究所としては、カナダのオタワにある NRC (National Research Council) と、世界的に有名な米国の音響機器メーカー BOSE 社の研究所、さらにニューヨーク州の Rensselaer Polytechnic (レンセラー工科大学) の建築音響研究所を訪問しました。ここでは、レンセラー工科大学の訪問について簡単に報告します。

建築音響研究所の教授である Dr. Ning Xiang とは国際会議でお会いして旧知でした。レンセラー工科大学はアメリカで最も古くて歴史のある工科大学の一つであるため、キャンパスには歴史的建造物が多く点在しています。また、キャンパス内に本格的な音楽ホールを建設中であり、それも見学しました。建築学科の建物では、建築音響研究所の各種施設や大学院生の設計作品などを見せていただきました。

また、建築音響を専攻している大学院生向けに Guest Lecture (招待講義) を依頼されたので、私の研究紹介と“ホール音響のミステリー”と題して、現在のホール音響に関する未解決の研究課題について1 時間ほど講義をしました。もちろん言語は英語でしたが、講義中に私が話している最中でも、学生が手を挙げて積極的に質問するなど大いに盛り上がりました。その後、Dr. Ning Xiang の大学院授業も聴講したのですが、やはり学生が教員を質問攻めにしていました。アメリカの大学院の授業の雰囲気は日本のそれと異なっており、たいへん刺激を受けました。

今回、限られた紙面ではとても話しきれない貴重な体験をたくさんしました。興味のある方は写真やビデオなどお見せしますので研究室を訪ねてください。

(はにゅうとしき・准教授)



レンセラー工科大学にて (Dr. Ning Xiang と、後ろは建築学科の建物)



レンセラーの大学院生から自身の設計作品の説明を受ける



レンセラー工科大学での大学院生向け招待講義の様子

こころの支え

葎内博史

筆者略歴

1954年 東京都生まれ
1981年 早稲田大学大学院修士課程修了
(池原研究室)
1981年～ 株竹中工務店
(現在設計部設計担当部長)
1986年 第二国立劇場国際設計競技 最優秀



人は不思議にも、記憶に蓄えられた多くの言葉に支えられて生きている。その言葉はまた人が発したものであるから、そういった意味で人はあらゆる場面で人に支えられて生きているともいえる。今年、日本建築学会の副会長になった中川武さん（現早稲田大学教授）の言葉に、直接的ではないけれど、僕は自身の最もつらい時期を支えてもらった。

建築を目指したころ工学系の建築学科はいっさい頭の中に無く、建築とは美術系としか考えていなかった。東京芸大に入れてもらおうと、高校を卒業してからはじめて御茶ノ水美術学院でデッサンの勉強を始めた。美術学院にはちゃんと美術系建築学科受験クラスがあり、二浪・三浪、果ては30歳近い六浪・七浪の同級生の中で初めて建築の世界に出会ったといえる。当時このクラスの先生には、現在の山本・堀アーキテクトの山本圭介さん（まだ東大の大学院生）や、入江経一さん（まだ芸大の大学院生）が私たちのたわいない建築論に付き合ってくれていた。1年後に芸大を受験したが見事に落ち、このまま同じ1年をまた過ごすのは自分のためにならない、漠然としていながらも自分が掴み始めていた建築に対するイメージが都市を中心としたこの学校の中には無いと、一念発起京都に移り住んだ。京都では、たまたま知り合った友人たち（京都には東京出身のごろつきが沢山いた）と古い町屋を借り、柔らかな光が障子を通して入ってくる、光庭に面した奥の部屋で1年を暮らし、大きな影響をうけた。永く浪人して居られないこともあり、京都の予備校で工学系の受験勉強も始めたが、そのほとんどの時間をさまざまな古都の貴重な空間の中で、平日の誰も居ない時間にたっぷりと味わうことに費やした（多分、それらの空間の多くは人や時間・音の密度がああのぐらい疎であった時代に成立していたのだと思う）。傍ら、画材の沢山置いてあった私の部屋は、自然と近所の子供たちが集まって勝手な絵を描き始める場所となり、子供たちに地藏盆のまつり（町全体というより個々の「通り」が其々中心となっていた）に入れてもらったり、時折やってくる「ロバのパン屋」に、ともに群れて食べ、遊ぶようになった。まだ学生の山本容子さんが河原町のちい

さな本当にちいさな画廊で初めての版画個展を開いて、個々が自分たちの周りの小さな世界を少しずつ広げ始めていたような時代だった。

次の年、デッサンで落ちたのが東京芸大、デッサンで入ったのが早稲田の理工学部（後にデッサンの採点を担当していた池原義郎先生が教えてくれた）。当時の理工系大学では、社会と建築の関係を「生産」やその使命として論じていた頃であり、不思議な論理と時代の持つ特別な表現（学生運動の後）が一緒になり、沢山の言葉が尽くされているものが評価されていた。詩的な価値を持つあいまいな「空間」表現で当時の先生たちに反抗していたが、評価が高かったわけでは無かった。例えば学部3年時課題に、鉄骨造の練習課題として「美術館」があった。森の中に点在する崩れた納屋の様な空間をななめに横断する道、小さな泉を持った汚れた便器のある錆びて腐りかけた波板鉄板の便所、東京近郊の農家が半分地面に埋まってしまったような展示室。工学部の鉄骨造の練習課題としては全く説明のつかない作品。いくつもいくつもそんな作品を提出し、卒業設計では小さな山の奥の住宅に取り組んだ。まるで個人の原点を探るような試みは自分としても挑戦だったが、評価は極めて低かった。例年のように各年の卒業設計をまとめて批評する学内機関紙が発行され、その年の編集を担当していたのが中川武さん（当時まだ助手）だった。一般的な上位作品の総評とは別に、中川さんはこの何年かのさまざまな試み（僕だけでは無かったが）を継続的に批評してくださり、特に印象的な一群として評価し論じてくれていた。その数少ない言葉のいくつかは卒業後の僕の最もつらい時期を支えてくれた。大学院を卒業してから僕は総合建設業に就職したが、31歳まで永く作業所にて施工を担当していた。いつかきっと自分も作品作りに参加できるのではと、忍耐と希望の交錯する日々の中で当時の僕を支えてくれたのが、この時の中川さんの言葉だった。

この場をもって、お礼をいいたい。

（よしうちひろふみ・非常勤講師）

建築音響の世界に入って

佐竹 康

筆者略歴

1976年 東京都生まれ
2001年 博士前期課程建築学専攻修了
(環境・情報研究室)
2001年～ 日東紡音響エンジニアリング(株)
(工事部所属)
2007年～ 同社研究開発部所属



私が音に興味を持ち始めたきっかけは、幼少の頃の遊びの中にありました。例えば輪ゴムを弾いたり、ピンを吹いたり、土管の中を蹴飛ばしたり、とにかく奇妙な音を面白がっていた気がします。そんな“面白がり”が、楽器など一切弾けないにもかかわらず中学生の時に購入したシンセサイザーへと繋がります。そこから、音を発振する装置の設計に憧れを抱き始めました。しかし、進路選択が迫られる高校2年時、物理の電気・電子の授業でつまずき、夢の実現に必要なと思われる電気・電子学科への進路を諦め、まだ当時、その中身を理解していなかった建築音響という分野がある建築学科を志望することになりました。

入学後在学3年間で、設計、構造、設備、環境と幅広い講義を受ける中、花形である意匠にあこがれた時期もありましたが、初志貫徹、建築音響の分野を選択して関口研究室を訪ね、ご指導いただくことになりました。

ホールの室内音響における主観評価をテーマに研究に取り組んだのですが、先生方には研究のみならず、大学を離れた場においても、音という物理現象を、建築を通じて体感できるさまざまな機会を与えていただいたことにより、音への“面白がり”を、建築空間にも展開できることを教わり、今の進路を決定するに至りました。

修士課程修了後、音響に係わる建築設計・施工から、測定・コンサルティング、計測システム設計・開発を行っている会社に就職し、設計・施工を行う部署に配属されました。そこでは、メーカーなどの音響実験室（残／無響室・試聴室）や、TV局・音楽などの録音スタジオ、またピアノ室からホールまでの設計・施工を行っています。

大学では、室内音響分野で、良い音についてしか取り組んでこなかったのですが、実務においては、良い音を計画する以前に、まず、悪い音を対策することが第一で優先されなければならないことを痛感しました。周辺からの騒音・振動の侵入を防ぐと同時に、室内で発生する音が外部に漏れないための防振・遮音設計を行い、遮音性能、静けさといった音響性能を確保します。それらの仕様をクリアしてはじめて、良い音についての音響設計が行えます。

しかし、良い音の評価基準は、部屋の用途によって異なります。音を数値によって評価する無響室などの場合、JISなどの規格と、測定した物理量を比較して定量的に評価できます。一方、音を聴感により評価するホールやスタジオなどの場合、主観的な評価となり、その評価軸に合った客観的な物理量と対応をとる必要があります。ホールなどでは、多くの研究成果から、さまざまな評価に適合する物理指標が提案されていますが、試聴室やスタジオなどの小空間においては、まだその評価方法がほとんど確立されていないのが現状です。また一般に多くの人を対象とするホールと違い、感性の分野でのプロを対象とするスタジオでは、より多様で緻密な評価軸が存在するので、既知の物理指標を満足するだけでは納得していただけないケースがほとんどです。そのため竣工後、一緒に音を聴きながらお互いの耳で判断し、そこからクライアントの個性にベクトルを合わせて、最後に室内音場を調整する作業が必要となってきます。この作業は数値で評価できない音を追求する醍醐味でもあります。また当然のことながら、求められるものは音響性能に限らず、機能性、居住性、デザイン、あるいはコストパフォーマンスと多岐にわたるため、そのバランスをとることが非常に重要で、難しいところでもあります。

今後も、音への“面白がり”を通して、建築空間における音の良さについて、それを裏付けるパラメーターを模索していきながら追求していければと考えています。

(さたけやすし)



IMAGICA 品川
ポストプロダクションセンター



サウンドインスタジオ Fstudio

新任非常勤講師紹介

建築学科

川島 茂 先生
(デザイン基礎、
建築設計Ⅰ)



1×1／2×2

略歴

1992年 日本大学大学院理工学研究科博士前期課程修了
1992～99年 (株)竹中工務店(設計部)
1999年 川島鈴鹿建築計画共同設立

知人のライターが「原稿は期限があるから苦しいけどがんばれる。建築は長いでしょ？ しんどいよね。」はじめて担当した現場の所長が「どんなに辛くても終わらない現場はない。それは幸せなこと」と。終わりがあることはなにかと幸せのよう。ところが「建築をつくる」と「現場が終わる」ことは同義でなかったとその後知った。竣工後に迎え湧き出る問題や新たな要望と相談。なにより、クライアントとともに建築という一大事を体験した熱烈な人間関係は決して断ち切れるものではない。「建築は終わらない」といまは考えている。でも、建築はやめられない。きっと終わらない幸せだってあるのだと思う。

(かわしましげる)

建築学科

田口知子 先生
(建築設計Ⅱ, V)



うつのみや
アパートメント

略歴

1990年 東京大学工学部建築学科卒業
1990～98年 長谷川逸子・建築計画工房
1998年 田口知子建築設計事務所設立

建築を考えることは人間の幸せについて考えるということです。自然環境や物質的な技術の知識と探求は、未来へのビジョンがあってはじめて意味のあるものになります。みなさん、学生時代の間に、人間の幸せや美しさ、創造性について深く考えて、設計の中で自分自身を表現してください。設計では、要求されたことに対応するだけでなく、何のためにそれを作るのかという問いを持ち続けてください。そのことを建築で表現することの楽しさを味わいましょう。

(たぐちともこ)

建築学科

仲亀清進 先生
(デザイン基礎、建築設計Ⅰ)



略歴

1989年 日本大学理工学部建築学科卒業
1990～92年 近藤春司建築事務所
1995年 仲亀清進建築事務所設立

はじめまして。仲亀清進です。私は日本大学理工学部建築学科を卒業しました。

学生だった頃、非常勤講師として来ていた建築家の授業を受け、それがとても楽しく、建築の魅力を知り設計の仕事に就ききっかけになりました。現在も楽しく設計を続けています。

図面や模型を通して、ものをつくる楽しさや建築の魅力を伝えられたらと思っています。

(なかがめきよのぶ)

大学院建築学専攻
東 建男 先生
(建築デザインⅡ)

略歴

1984年 早稲田大学大学院修了
1984年～ 伊東豊雄建築設計事務所



建築を造るプロセスは一つの航海に似ている。漠然とした方向性はあるものの、出港の段階では目的地すら分からない。それでも船は出なくてはならない。これは冒険なのである。学生の諸君は今のところたった一人のクルーであり乗客を兼ねているから、不安ではあるがフラフラできる気楽さと自由を保っている。しかし、いずれは多くの乗客と問題を乗せ、あるいは、あれこれ指示する多くの船頭たちと運命をともにするだろう。大学院の設計課題は、この航海のシミュレーションである。命を失う恐れはないけれど、自信とプライドは測られるだろう。良い航海と冒険を祈ります。
(ひがしたけお)

短大建設学科
上條美枝 先生
(デザイン基礎、
建築設計Ⅰ)



志木の家



略歴

1987年 東京理科大学大学院工学研究科修士課程修了
1987～89年 丹下健三・都市・建築設計研究所
1990～98年 伊東豊雄建築設計事務所
1999年 上條美枝建築設計室設立

建築をデザインするということは、その建築に関わる物理的条件や環境、社会、文化などを、どう捉えどう考えるかということであり、それらの問題に対して、いかに的確な判断を下していけるか、ということが重要であると思っています。建物はさまざまな人が関わって造るものなので、設計者には、全体を見通す力とコミュニケーション能力が必要です。授業を通して、これからみなさんが建築とどのように関わっていくのか、一緒に考えていきたいと思っています。
(かみじょうよしえ)

短大建設学科
薩田英男 先生
(デザイン基礎、
建築設計Ⅰ)



白山通りのいえ



略歴

1978年 東京理科大学工学部建築学科卒業
1987～89年 イタリア政府給費留学生ヴェネツィア建築大学
1981～87年 AUR建築・都市・研究コンサルタント
1990年 薩田建築スタジオ設立

建築は素材と手を元として知恵を加味し造られる。民家はそうした典型である。現代の情報社会のなかでこの当たり前のことに立ち返って建築を考える。そのために着目したことは「土」と「左官」である。若いひとには左官という言葉は聞き慣れないだろうが、壁を塗る行為あるいはその職人をさす言葉である。私の計画した建物には必ずといってよいほど土壁が使われる。鉄骨造、鉄筋コンクリート造といった現代の骨組みに人の手と自然の土の素材を組み合わせることで、場所性を再認識し、過去の記憶を現在に、さらに未来へと時をつなぐことが重要と考えるからである。
(さつたひでお)

短大建設学科
桑原 茂 先生
(メディアデザイン演習Ⅰ、Ⅱ)



松の家



略歴

1997年 コロンビア大学大学院卒業
1997～98年 Greg Lynn form
2003～07年 ラウンドテーブル一級建築士事務所共営
2007年 桑原茂建築設計事務所設立

IT時代といわれ久しい。どうも我々は産業革命以来の大きな変革期を生きているようです。かつての革命は、建築の領域においても大変革をもたらしました。技術・工法・材料が刷新され、新たな用途が生まれ、次々と新しいデザインが創発されて来た史実を知っています。生まれた時からPCに接して来た皆様にとって、革命という実感はむしろ薄いかもしれませんが、「ものづくり」のあらゆる過程にデジタルが導入され始めた現代は、次世代デザインが誕生した創成期として後世では認知されることでしょう。デジタルメディアと密接に付き合いながら建築を考えることは、時代の空気感に即していませんか。
(くわはらしげる)

平成18年度 建築学科就職状況

建築学科就職事務室

◆概況

ここ数年、景気の回復と何かと話題に上る2007年度問題（団塊世代の引退による求人の増加）によって、企業の求人活動がますます活発になっている。求人件数（表-2）でみると、一昨年の異常な件数増加は去年に引き続き一応のペースに落ち着いていたが、企業の実質的な求人意欲は高かったといえるであろう。

平成18年度就職希望者は、学部・院合計で298名と前年よりも多かったのであるが、それに対し就職内定者が270名、内定率90.6%となり、昨年の85.1%に比べて大幅に増加し（表-1）、大変喜ばしい結果となった。

求人企業の方々と会うと、「ぜひ日大理工の建築から我が社へ入ってほしい」とのラブコールが多く、就職活動をする学生諸君からすると数年前とは大違いの状況であることを認識して、自分の将来を確固たる信念で就職に挑んでほしい。

進学者数も99名で昨年の90名より増加している。大学院でより専門的な知識・能力を高めることは就職にとっても有利になる。特に大手

の設計組織（建設会社の設計部や大手設計事務所）は大学院修了者を希望することが多い。我が日大理工の建築は大手の設計組織には必ずどこにでも先輩がおり、彼らがリクルーターとなって日大のレールが引かれているので、ぜひ日大大学院で十分設計の実力を積んで、大手設計組織を狙っていただきたい。

就職でも進学でも、学習成果は多に問われることであり、普段からの学習は大切である。また就職希望者は、企業に入ってから実際にどのような仕事をするのか、指導教員、先輩などからよく聞いておくことが望まれる。

◆求人企業の状況

求人企業数は昨年度の772社から716社と減少したが、内訳はほぼ例年通りといえよう。昨年はさらなる景気回復とともに、企業側の新人確保の意向が強くてため、求人数が多く充実した内容となったように思われる。すべての規模の建設業は、建築の学生を強く求めており、特に有名建設会社から施工技術者として日大生枠をもって多く採用計画があるにも関わらず学生諸君からのアプ

ローチが少ないのが残念であった。数年では考えられなかったほどの求人状況なので、他大にはない日大の優位さをぜひ利用して、設計をも含めた建築の現場を一生の仕事にしたいと思う。

◆就職内定者の内訳

求人企業の内訳、具体的に採用決定した企業名などは表-3、および表-4 A～Jを参照していただきたい。

昨年の傾向として、それまでいわゆるハウスメーカーへの就職が多かったがここに来て減少している。建設業も学部と大学院をあわせても前年よりは減少しており、建設の現場離れが進んでいるように思われる。建築の設計関係は順調に伸び学部大学院ともに内定率は上がってい

表-2 月別求人件数

	平成18年度	平成17年度
11月	13	15
12月	31	28
1月	100	134
2月	162	160
3月	124	98
4月	74	88
5月	104	88
6月	58	74
7月	25	35
8月	16	8
9月	6	28
10月	0	4
11月	2	6
12月	0	6
1月	1	0
2月	0	0
3月	0	0
合計	716	772

表-1 就職状況の概要

注：（ ）内は女子内数

	平成18年度			平成17年度		
	学部	大学院		学部	大学院	
		建築	不動産		建築	不動産
就職希望者数	231(73)	63(18)	4(1)	208(61)	61(10)	7(1)
就職内定者数	207(66)	59(16)	4(1)	178(54)	50(4)	7(1)
大学院進学者数(留学希望・その他含)	99(21)	9(2)	0	90(25)	3(2)	0
就職・進学者数	306(87)	68(18)	4(1)	268(79)	53(6)	7(1)
求人会社数	716			772		

る。また、コンピュータ関係も伸びておりデスクワーク志向の学生気質が読み取れる気がする。官公庁や法人への内定も増えたのは、景気がいいときは公務員は敬遠される、という考えは、ここにきて当てはまらないことを示している。

18年度は、建設業の内定割合が昨年度の18.1%に比べ、15.2%と減少した。設備系は、求人は多いが内定者率は1.3%で、非常に少ない。この分野ももっと希望者が増えることを望みたい。

表-3の内定者数割合(%)は進学者も含めた数値になっているが、就職内定者に対する比率でみると、

住宅・不動産がもっとも多く25.7%であるが前年の30.5%と比べると激減している。これに続いて建設業が15.2%であるがこれも前年の18.1%よりは激減している。一方で、設計事務所・インテリアが13.6%で前年の8.7%より伸びた数字となっている。前説でも示した通り、設備系、建材・エンジニアリング系、が非常に少ない。これら部門も建築専門家として十分に働ける面白い部門であるので、学生諸君には、もう少し研究してもらいたいと思う。

現3年生は、9月からはいよいよ就職指導が本格化し、秋以降就職活動は佳境に入っていく。年が明ける

と企業の活動はピークを迎え、本当に入社してくれるのかと問われる。それから考えるのではなく、年内に将来の進路を考えておくことが大切である。大学就職担当課、建築事務室、就職担当では、企業説明会なども準備し、学生諸君に種々情報提供を行う。夏休みから秋にかけて、自分の将来の進路について、友人、先輩、教員、身内の人などと積極的に話をし、準備を進めていただきたい。そして、十分な知識を身につけて、「建築の日大」の優位さを十分利用して自信の進路決定をしてほしい。
(平成18年度就職担当：今村雅樹、事務担当：矢萩有美子)

表-3 求人・内定者の内訳

	求人会社数				内定者数								内定者数割合
	大企業		中企業	小企業	計	大企業		中企業		小企業		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
A 建設業	75	118	60	253	36(6)	15(2)	5		1(1)	大学院	42(7)	15(2)	15.2%
B 住宅・不動産	45	65	11	121	58(21)	3(3)	24(9)	3(1)	7(5)	1(1)	89(35)	7(5)	25.7%
C 設備	22	49	12	83	2	3(1)					2(0)	3(1)	1.3%
D 設計事務所・インテリア	17	39	47	103	10(2)	5	6(1)	8(5)	12(3)	10(1)	28(6)	23(6)	13.6%
E 建材・エンジニアリング	28	51	9	88	4(4)		2(1)		1(1)		7(6)	0(0)	1.9%
F コンピュータ・情報	8	10	2	20	5(2)	1	1(1)		1(1)	2	7(4)	3(0)	2.7%
G 製造業・営繕・その他	20	9	4	33	12(4)	5(2)	2		2		16(4)	5(2)	5.6%
小 計	215	341	145	701	127(39)	32(8)	40(12)	11(6)	24(11)	13(2)	191(62)	56(16)	66.0%
H 官公庁・大学法人				7							12(4)	3(0)	4.0%
I 進学 (大学院・研究生・留学・その他)				8							1(0)	0(0)	0.3%
J 自営業											99(21)	9(2)	28.9%
総 計				716							306(87)	68(18)	100.0%
											374(105)		

以上の統計は学部、大学院建築学専攻に関するものである。

注：大企業…従業員500名以上、中企業…従業員100名以上、小企業…99名以下、()内は女子内数、求人会社数…再募集は除く。

表-4A 就職先の内訳〈建設〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
竹中工務店	1						1		1	0	鉄建建設			1				1		1	1
清水建設	1	2					1		2	2	北野建設							1		1	0
鹿島建設			1	1			4(2)	1	5(2)	2	穴吹工務店							1		1	0
大成建設	2			1			3(1)	1(1)	5(1)	2(1)	松井建設							1		1	0
大林組	1(1)	2							1(1)	2	りんかい日産建設		1							1	0
戸田建設	3	1							3	1	高松建設							1(1)		1(1)	0
西松建設	2	1							2	1	植木組							1		1	0
前田建設工業						2		2	0	0	NIPPOコーポレーション							1		1	0
フジタ			1					1	0	0	新日本建設							1		1	0
間組	1	3(1)						1	3(1)	0	佐田建設						1			1	0
東急建設			1				1	2	0	0	山田建設							1		1	0
鹿島道路							1	1	0	0	藤田建装							1		1	0
長谷工コーポレーション							1	1	0	0	埼玉建興							1		1	0
三井住友建設			1				1(1)	1(1)	1	1	フォレストコーポレーション							1(1)		1(1)	0
総計											11	9	5	3	1	0	25(6)	3(1)	42(7)	15(2)	

表-4B 就職先の内訳〈住宅・不動産〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		緑故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		緑故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
積水ハウス							8(3)	1(1)	8(3)	1(1)	三井リハウス東京							1		1	0
旭化成ホームズ							1		1	0	セキスイハイム東海							1		1	0
大和ハウス工業							10(4)		10(4)	0	積水ハイム信越							1		1	0
三井ホーム							1		1	0	栃木セキスイハイム							1		1	0
住友林業			1						1	0	ミサワホーム東京							4(4)		4(4)	0
ミサワホーム							2		2	0	ミサワホームイング東京							1(1)		1(1)	0
大東建託							1		1	0	ミサワホーム東海							1		1	0
大京							3(2)	1(1)	3(2)	1(1)	ミサワホーム静岡							1(1)		1(1)	0
木下工務店							6(2)		6(2)	0	トヨタホーム東京							3(2)	1	3(2)	1
三菱地所ホーム				1(1)					0	1(1)	トヨタホーム千葉							1(1)		1(1)	0
タマホーム							2(2)		2(2)	0	日本土地建物							1		1	0
ボラス							3(2)		3(2)	0	一条工務店群馬							1		1	0
一条工務店							2		2	0	木下リモデル							1(1)		1(1)	0
扶桑レクセル							1		1	0	ケンコーボレーション							1		1	0
東急コミュニティ							1	1(1)	1	1(1)	リビングライフ							1(1)		1(1)	0
東急アメニックス								1	0	1	オープンハウス							1		1	0
長谷工コミュニティ							3		3	0	サニワホーム							1		1	0
スターツコーポレーション							1		1	0	ライク							1		1	0
スターツアメニティ							1		1	0	リスト							1		1	0
スターツCAM							2(1)		2(1)	0	ザクテクノサービス							1(1)		1(1)	0
東日本ハウス							1		1	0	総和地所					1(1)				1(1)	0
東栄住宅							1(1)		1(1)	0	フルハウス								1(1)	0	1(1)
三井不動産販売							1		1	0	ノーブルホーム							1		1	0
住友不動産サービス							1		1	0	夢ハウジング							1(1)		1(1)	0
レオパレス21							2(1)		2(1)	0	明豊エンタープライズ							1(1)		1(1)	0
モリモト							1		1	0	ランドコム							1(1)		1(1)	0
東京ガスリモデリング							2(1)		2(1)	0	エルクリエイト							1		1	0
											総 計	0	0	1	1(1)	1(1)	0	87(34)	6(4)	89(35)	7(5)

表-4C 就職先の内訳〈設備〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		緑故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		緑故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
高砂熱学工業							1	0	1		朝日工業社			1						1	0
三菱電機ビルテクノサービス							1	0	1		東洋熱工業							1		1	0
三建設備工業							1(1)	0	1(1)												
											総 計	0	0	1	0	0	0	1	3(1)	2	3(1)

表-4D 就職先の内訳〈設計事務所・インテリア・コンサルタント〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		緑故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		緑故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
三菱地所設計							1	0	1		東京海上日動ファシリティーズ							1		1	0
久米設計							1	0	1		住宅・都市研究所							2(1)	0	2(1)	
山下設計			1					0	1		オフィス設計							1	1(1)	1	1(1)
エス・ティ・ティファシリティーズ							1(1)	1	1(1)	1	浦野設計							1	1	1	1
日建アクトデザイン								1	0	1	SAKO 建築設計工社								1	0	1
桂設計								1	0	1	アクトエンジニアリング							1		1	0
構造計画プラスワン								1	0	1	ラックランド							1		1	0
梅沢建築設計研究所			1					0	1	1	バウハウス丸栄							1		1	0
織本匠構造設計事務所								1	0	1	天童木工							1(1)		1(1)	0
渡辺明設計事務所					1(1)			0	1(1)	1	オムニ設計									1	0
すわ製作所／なわけんジム								1	0	1	構建設計							1		1	0
パシフィックコンサルタンツ								1	0	1	エスパス建築事務所							1(1)		1(1)	0
ビーディースシステム				1(1)					0	1(1)	インターデザインアソシエイツ							2		2	0
INA 新建築研究所									2(1)	0	一級建築士事務所 アイデアイン							1(1)		1(1)	0
東急設計コンサルタント								1(1)	0	1(1)	アトリエ・K			1						1	0
乃村工藝社							1	1	0	0	A i空間デザイン建築設計事務所							1		1	0
丹青社							2	2	0	0	ハイブリッジ							1		1	0
船場			2					2	0	0	ヴェディオール・コンテック							1(1)		1(1)	0
イケア・ジャパン							1	1	0	0	企業組合 針谷建築事務所							1		1	0
大塚家具							1	1	0	0	ポリテック・エイディティ								1	0	1
サンゲツ							1(1)	1(1)	0	0	ハウスプラス住宅保証							1		0	1
NECファシリティーズ							1	1	0	0											
											総 計	0	0	3	3(1)	2	1(1)	23(6)	19(4)	28(6)	23(6)

表-4E 就職先の内訳〈建材・エンジニアリング〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
YKK ap							1(1)		1(1)	0	ニップコーポレーション							1		1	0
INAX							1(1)		1(1)	0	ジャパンライティング							1(1)		1(1)	0
クリナップ							1(1)		1(1)	0	辰星技研							1(1)		1(1)	0
東陶バスクリエイト							1(1)		1(1)	0											
総 計												0	0	0	0	0	0	7(6)	0	7(6)	0

表-4F 就職先の内訳〈コンピュータ・情報〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
NTTデータシステム技術							1		1	0	アイ・エム・ジェイ							1(1)		1(1)	0
NEC ネットエスアイ								1		0	インクスエンジニアリングサービス							1(1)		1(1)	0
新日鉄ソリューションズ							1(1)		1(1)	0	構造システム								1		1
アイ・ティ・フロンティア							1		1	0	トータル・インフォメーション・サービス								1		1
TISシステムサービス							1		1	0	アルディート							1(1)		1(1)	0
総 計												0	0	0	0	0	0	7(4)	3	7(4)	3

表-4G 就職先の内訳〈製造業・営繕・その他〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
三菱電機		1								1	日興コーディアル証券							1		1	
みずほインバスターズ証券								1		1	京王観光							1		1	0
西川産業								1(1)		1(1)	東京トヨベツト							1		1	0
丸井								2(1)		2(1)	ウッドオフィス							1		1	0
三井造船							1			1	高見							1(1)		1(1)	0
大塚商会							2			2	エム・シーシー食品							1(1)		1(1)	0
ディーシーカード								1(1)		1(1)	サミー							1		1	0
第一生命保険相互会社								1(1)		1(1)	カインズ							1		1	0
東武鉄道								1		1	プラザ							1		1	0
ホテルオークラ東京								1		1											
総計												0	1	0	0	0	0	16(4)	4(2)	16(4)	5(2)

表-4H 就職先の内訳〈官公庁・法人〉

注：(財)は省略 ()内は女子内数

会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会 社 名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
東京国税局							1		1	0	横浜市役所							1(1)		1(1)	0
東京消防庁							1		1	0	日野市役所							1(1)		1(1)	0
防衛庁自衛隊							1		1	0	柏市役所							1		1	0
新宿区役所								1(1)		1(1)	茅ヶ崎市役所								1		1
品川区役所									1	1	相模原市役所							1		1	0
目黒区役所								1(1)		1(1)	ふくば市建設工務局建設工務課				1						1
群馬県警察								1		1	日本国際協力システム							1		1	0
さいたま市役所								2		2											
総 計												0	0	0	1	0	0	13(4)	2	13(4)	3

表-4I 就職先の内訳〈進学〉

注：()内は女子内数

	学部	大学院	計		学部	大学院	計
日本大学大学院	59(11)	3	62(11)	武蔵野美術大学大学院	1		1
東京工業大学大学院	1		1	cavendish college	1(1)		1(1)
筑波大学大学院	1(1)		1(1)	日本工学専門学校	1(1)		1(1)
横浜国立大学大学院	2(1)		2(1)	留学希望	2		2
新潟大学大学院	1		1	その他	26(5)	6(2)	32(7)
慶應義塾大学大学院	4(1)		4(1)				
総 計					99(21)	9(2)	108(23)

表-5 企業内定の応募方法

	学部	大学院	計	比率
教室推薦	11	10	21	8.5
研究室推薦	10	7	17	6.9
縁故推薦	4	1	5	2.0
自由応募	166	38	204	82.6
総 計	191	56	247	100.0

注：官公庁、法人、大学院進学、自営業を除く。

表-4J 就職先の内訳〈自営業〉

注：()内は女子内数

	学部	大学院	計		学部	大学院	計
住宅・不動産	2		2	製造業・営繕・その他	1		1
総 計					3	0	3

2007年関西研修旅行報告



知恩院修復現場

建築史建築論研究室では毎年2月に関西研修旅行を開催しております。実物に触れ、体感することで授業や書物から得た知識をより深いものとするを目的とし、古建築から近代建築まで幅広い年代の建築を見学できる関西の地を巡りました。

日程：2007年2月19日（月）～2月23日（金）

参加者：学生33名 引率教員6名

見学先：

2月19日（月）

東大寺（南大門、大仏殿、二月堂、三月堂）、薬師寺、奈良ホテル

2月20日（火）

法隆寺、慈光院、平等院（鳳凰堂、鳳翔館）、萬福寺

2月21日（水）

知恩院（集會堂、鐘楼、御影堂）、大徳寺（孤蓬庵）、京都府立陶板名画の庭

2月22日（木）

無鄰庵、南禅寺（金地院）、重森三玲庭園美術館、佳水園

2月23日（金）

綿業会館、旧山邑邸

関西研修旅行の魅力は、実際の建築物と向き合いながら先生方の解説を聞くことができることです。疑問が生じればすぐに質問することができます。見学先ではもちろんのこと、予定された場所以外にも、移動中に足を

止めて建築物の解説をしてくださり、限られた時間のなかでより多くの建築物に触れることができました。

また、この旅行では個人的には訪れることのできない場所を見学することができます。今年は知恩院集會堂の修理修復工事現場を見学させていただきました。現場監督の方の丁寧な説明を受け、部材や瓦を間近で見ることができました。

（幹事・飯田智由紀・高木愛子・三枝一義・永松大作・片桐研 M2）

建築を研修する旅行

河合晴香（4年）

毎年行われている関西研修旅行に今回初めて参加した。建築学科に入ってから今まで、個人で建築を見る旅行は何度かしていたが、研修旅行に参加してみて、建築をただ見るのではなく知識をふまえてじっくり見ることで、より深く染みてくるものがあると感じている。

私が研修旅行で最も楽しみにしていたのは知恩院の修復現場見学であった。一般の公開はされていないものである上に、現場の方から解説をしていただけるという非常に貴重な体験である。解体されている大屋根を前にして、木材の大きさや量が想像以上に膨大であることに驚いた。お堂の屋根を一つかけるのにこれほどの木材が費やされているということは、自分というスケールが現場に建つことで、その修復がいかに大々的なものであるかというのが言葉ではなく感覚で伝わってくる。さらに普段は見るのが難しい屋根も、使われている部材を間近で



慈光院



法隆寺夢殿



平等院鳳凰堂

見ながら構造の説明を受けることで、ただ記憶していた部材の単語が意味を持って頭に再度入ってくるだけでなく、図式化して覚えていただけた力学の知識が生かされているのが分かった。

この旅行においては行程も重要な役割の一つであるように思う。目的地は大きく分けて奈良・京都・神戸と三箇所あるが、古代、中世、近代、現代と時代を追いつながら見学することで、様式・装飾の変化や技術・材料の変化などといった建築が現代に至るまでを追うことができる。建築物ができて、それが朽ちて、再度建築し直す。この流れは昔も今も根本的には変わっていないような気がする。

奈良で法隆寺を見たとき、歩きながら回廊のわずかな傾斜や窓格子の形状、回廊の屋根の丸みなどさまざまな箇所に目を配りながら普通の旅であれば疑問で終わっていたことを先生に思い切ってぶつけてみた。疑問に自分なりの見解を持ちながらより専門的な意見を求め、さらに目の前にある実物と比較検証できるという機会は非常に貴重であるということはこのときよく分かった。それも自分で建築をただ見ているだけではその後に残るものは少ないが、話を聞き、それを確かめてみて、さらに自分なりに検証してみることで「研修」というこの旅の目的が少しでも果たせたのではないかとと思っている。

また、普段はなかなか縦のつながりがない建築学科であるが、旅行中には先輩や後輩とも話す機会があった。そういった交流というのも自分の意見を気軽に話し合えるだけでなく、建築だらけの旅行で息抜きのできる楽しい場所でもあった。

ジャパーンな雰囲気につつまれて

勝原基貴（4年）

久々の鹿との対面が、奈良へ到着したことを感じさせる。連日花粉に脅かされる中、恒例の関西研修旅行が行われた。数々の参観した寺院仏閣や風情ある古都の街並みは、どれも日本人であれば残していきたいと思わせるに足る美しさである。しかし、そういった感情は残念ながら、失われようとして初めて湧き起こるものなのかも

しれない。倫理や道德の範囲だけで扱ったがゆえに生じた負の景觀に、将来の危機感を持たせることは難しい。

一方、印象深かった見学地は、浄土宗総本山「知恩院」である。800年大遠忌記念営繕事業の一環として、国宝である御影堂の半解体修理が行われており、修理現場の見学を行った。瓦が外され、露わにされた木骨の迫力に圧倒。先人の叡智を感じるとともに、「われわれ」の直面する問題に、「かれら」のやり方で解決策を見出し実行する、という想いの元に修繕活動をしている人に出会えた喜びが大きかった。「知恩院」での経験は両者を隔てる無視しがたい違いなのかもしれない。

同じく京都では京都陶板名画の庭（安藤忠雄設計）、京都駅（原広司設計）といった現代建築も多く見受けられる。ともに地球上の物質から構成されている建築であるが、これほどまで成果物に大きな差があると思うと、現在、建築を学ぶ者としては新たな危機感である。

中間日に行われた懇親会では簡単な自己紹介を行った後、教員・学生一同杯をかわし、お酒の飲める飲めないを問わず、ともに歓談を楽しんだ。今年度の3年生（現4年）は、建築史建築論研究室を志望するメンバーを主として4人と少なく、これまで相互間で必ずしも互いのことを知らなかったが、この研修旅行によって相当親睦が深まった。参加人数の少なさは就職活動の早期化が最大の原因と思われる。

最終日は、旧山邑邸（現ヨドコウ迎賓館）で集合写真を撮った後、解散した。参加者のほとんどは帰宅したようであるが、大川先生にご紹介いただいた「旧乾邸」の内覧会に翌日お邪魔させていただいた。存続が危惧されていた渡辺節設計の邸宅である。海運業で名を馳せた乾新兵衛との親交があって実現した。研修旅行中に綿業会館（渡辺節設計）を見学していただけたのに、階段周りの装飾やコルク壁など随所に見受けられる共通点が興味深い物だった。同一建築家であるだけに当然ではあるが、まるでミニチュア版のようであった。相違点を自らの身体で確かめることができ、とても貴重な経験となった。



佳水園



綿業会館



旧山邑邸

短期大学部建設学科 オリエンテーション報告



設計系の先生方

平成 19 年 5 月 17 日（木）、恒例の 1 年生を対象としたオリエンテーションが実施された。当日は、あいにくの雨模様ながら、1 名の病欠を除き、建設学科 1 年生 94 名が参加、専任教員 6 名、設計系非常勤講師 5 名と総勢 105 名が 3 台のバスに分乗し、理工学部駿河台校舎 5 号館を出発した。

今回の建築探訪のテーマは、『温故知新』。見学先として、武蔵野の面影が残る世田谷区立次大夫堀公園民家園と横浜の大栈橋フェリーターミナルおよび赤レンガ倉庫群の 3 箇所を選定した。“故きを温ね新しきを知る”。

時代の評価を得た建物や街並みを尋ね、建築空間に身をおくことにより、そこに暮らす人々の生活の息吹を感じとってほしい。

世田谷区立次大夫堀公園民家園では、短大建設学科卒の高橋深雪さんが、研究員として民居の架構、伝統やしきたり、四季折々の歳時記にふれつつ、伝統民居をこよなく愛する眼差しで後輩のために、解説して下さった。おりしも、当該民家園を対象として繰り広げられた編入学生 2 名による昨年度の卒業研究「伝統的養蚕型建築(旧加藤家)における温熱・空気環境の実態(その 1) 温熱環境の実態とメカニズムの検討、(その 2) 実測とシミュレーションによる室内空気環境の実態」が建築学科校建賞として顕彰され、オリエンテーションの予備学習として、授業においても、その工学的背景を把握した上で伝統民居を訪れたことは、大変意義深いものがあった。今後、授業とリンクしながら、オリエンテーションが举行されれば、より理解力が深まるものと思われる。

午前中の古建築探訪を終え、横浜中華街（重慶飯店新館）を訪ねた。中華料理のフルコースをリーズナブルな価格で提供いただき、「おいしかった!」となかなかの評判だった。

午後は、「建築情報リテラシ」の授業で予備学習した大栈橋フェリーターミナルに移動し、コンピュータなくして語れない空間を縦横無尽に歩き回することで、技術と循環型建築が融合した貴重な建築空間を実体験した。屋内外に張り巡らされたデッキにはブラジル原産の最高級ハードウッド材「イペ」が多用され、比重 1 相当という木片を記念に購入し、翌週の授業で、民家園にて紡いだ「繭（まゆ）」と共に回覧したところ、感嘆の声が上がった。

赤レンガ倉庫群に移動した頃には、雨もあがり、大栈橋を背景に全員で記念撮影をした。保存・活用を考える上でも格好の生きた教材である倉庫内外を自由に散策しながら建築の醍醐味にふれたことで、古き良きものからのメッセージを体得することができたものと思われる。そしてオリエンテーション翌日、新たな友人とともに研究室を訪ねてくれた学生諸氏がいたことは、何よりも嬉しく、教師冥利につきる。

17 時 30 分、全行程を終え全員無事、駿河台校舎に到着し、バスは船橋経由で関係者全員が帰途についた。

[文献] 平成 18 年度教委第 8 号 企画展「古民家と養蚕」

吉野泰子・高橋深雪

(短大建設学科 1 年クラス担任・吉野泰子・教授、
黒木二三夫・准教授)



次大夫堀公園民家園



短大卒業生高橋深雪さん(民家園)による解説



雨上がりの大栈橋フェリーターミナルを背景に
赤レンガ倉庫横で記念撮影

山形のふたつのコンペ

末岡佐江子 川島 茂

最近、山形で行われたふたつの公開プロポーザルコンペに高宮眞介非常勤講師（本年3月まで建築学科教授）が設計者として選ばれた。山形県米沢市に建設される「山形大学工学部創立100周年記念会館」、山形県村山市の市立図書館と交流施設を含む「村山市総合文化複合施設」で、現在、それぞれの施設の基本設計に着手している。共同設計者の2人が報告を行う。

山形大学工学部創立100周年記念会館

末岡佐江子

米沢市にある山形大学工学部が2010年に100周年を迎える。その記念事業として大学OBが組織する米沢工業会が中心に、記念会館建設を企画、設計者選定のプロポーザルコンペを開催した。

工学部キャンパスの正面に位置し、明治期に建設された「旧米沢高等工業学校本館（以下、「旧米工本館」）に隣接するキャンパス正門を含む空地が計画地である。

既存正門は人と自転車と車のアクセスが混成する散漫な印象であった。それらのアクセス動線を整理するとともに、「旧米工本館」と「記念会館」というふたつのシンボルを両翼に配するよう、ふたつの施設の間にプラザ（広場）を設けた。それにより大学のアイデンティティの強化をはかり、正門入口としての「構え」をつくることが相応しいと考えた。

また、諸室の配置よりもそれぞれを「つなげるもの」＝「サーキュレーション」をデザインすることに焦点をあてた。それは内部のプログラムがいかに変わっても、その繋がり強度だけは維持できると考えたからだ。

「旧米工本館」とプラザを介して向き合う「記念会館」



山形大学・キャンパス正面より計画をのぞむ



山形大学・計画模型俯瞰

とは軒高を揃えるなど景観的配慮をしながらも、「明治」の建築と新たな時代を切り開く「平成」の建築としてのシンボル性を保ちながら対峙することとなる。

（すえおかさえこ・助手）

村山市総合文化複合施設

川島 茂

村山市は東京から山形新幹線で3時間余り揺られた先にある。その中心市街地に計画地はあるが、獅子に扮した若者が一心不乱に踊る「徳内まつり」のころを除くと、この地区が賑わいを失って久しい。中心市街地の再生を目指した整備計画が市民と行政の手でつくられつつある。その核施設が図書館と交流センターを複合した今回の計画である。市民から求められたテーマは「交流と学習によるにぎわいの創造」であった。

この場所を訪れる人々に「にぎわいの創造」の手がかりを提供すべく、建物の中心に正方形の広場を設けた。この広場を「祝祭広場」と名付け、各施設へのアクセスに利用されるよう、図書館や諸室機能は「祝祭広場」を囲い込むように配置した。また、その広場はさまざまなイベントに対応できるような仕掛けがある。このような配置、仕掛けにより建物内外のアクティビティは互いに交信し、さらに諸室や図書館を巡る吹き抜け空間を伴った回遊動線が複雑に織り込まれ、行動と視線がさまざまなシーンとして行き交うよう意図した。これは来館した人に賑わいを敏感に察知し、かつその発信者となることを促したためである。

この施設建設には多くの村山市民が注目し、都市再生を願ってやまない。村山市出身の建築家、高宮眞介への期待は大きく膨らみ、それに応えるべくすでに沢山のスタディ模型が事務所に山積みされている。竣工は平成22年の予定である。

（かわしましげる・非常勤講師）



村山市・計画俯瞰

■斎藤公男教授が、第50代日本建築学会会長に就任した。任期は6月から2年間。

■斎藤公男教授、岡田章教授、宮里直也非常勤講師が、2007年日本建築学会教育賞（教育貢献）を受賞した。この賞は本年新設されたもので、学内外で実施してきた約15年にわたる教育活動と手法である「創造性を育む体験的建築教育—空間と構造を結ぶものづくり教育の試み—」が高く評価された。

■小川広次非常勤講師（'81年度卒業）が、『阿佐谷南の家』で2006年度JIA新人賞を受賞した。



阿佐谷南の家（撮影：新建築社）



アシタノイエ

教室ぶろむなード

■黒川泰孝氏（'01年度修了、メジロスタジオ主宰）が、『アシタノイエ』で小泉雅生氏（首都大学東京准教授）と連名で2007年日本建築学会作品選奨を受賞した。

■小嶋勝衛教授、根上彰生教授、宇崎勝也准教授、中村豪君（'05年度修了、興和不動産）共著の原著論文「絶対高さ型高度地区を活用した建築物の高さ制限に関する研究」が、日本建築学会計画系論文集No.615（2007年5月）に掲載された。

■大川三雄准教授、矢代眞己短大准教授、野沢正光非常勤講師、梅宮弘光氏（神戸大学准教授）他3名と共著の原著論文「山越邦彦のエコロジカルな住宅思想に関する多面的研究—住宅における環境技術のパイオニア：その思想と実践から学ぶこと」が、住宅総合研究財団研究論文集No.33（2006年版）に掲載されるとともに、研究選奨に選定された。

■大川三雄准教授、渡辺研司氏（'87年度卒業、東海大学准教授）の共著による『docomomo 選モダンイズム建築100 + α 』（河出書房新社）が刊行された。モダンイズム建築の記録と保存の世界的組織である docomomo の日本支部によって選抜された100選の建築を中心に、一般向けにわかりやすく解説した近代建築の入門書である。

■田所辰之助短大准教授は、4月21日に広島大学学生会館で開催された2007年度建築史学会大会記念シンポジウム「二十世紀モダンイズム建築研究の方向性—広島ワークショップ—」において、

講演「ドイツの近代建築と『機能主義』再読の可能性」を行い、パネルディスカッションのパネラーを務めた。

■田所辰之助短大准教授と金澤昭君、川島悠都君、木川正也君（以上、3年）は、6月11日に本郷交流館で開催された「本郷元町公園と旧元町小学校校舎：再生と利活用をめぐる対話—壊すより工夫を凝らそう！ 再生ワークショップ」（主催：元町公園市民の会）において、元町小学校コンバージョン計画案「ツツキのはじまり」を発表した。同案は短期大学部建設学科の卒業制作として提出された内容を発展させたもの。

■6月17日に「付属高校生のためのCST オープンカレッジ」が開催された。付属高校の生徒を対象としたイベントで、白井伸明教授の学科オリエンテーションに続き、川島和彦専任講師、山田雅一助教、田嶋和樹助手によるミニ講義が行われ、多くの付属高校生が来場した。



CST ギャラリーでのパネル展示

■「NU 住宅展2007」が、6月11～15日にCSTギャラリーで開催された。昨年度に行われた、大学院「建築デザインワークショップ」、横河・高宮両研究室の3年生「ゼミナール」で設計された作品を展示。

■岡村武士准教授が5月31日をもって退職された。永い間ありがとうございました。

●駿建目次

（2007.7 Vol.35 No.2 通巻144号）
表紙「山形大学工学部創立100周年
記念会館」
設計：高宮眞介＋高宮研究室

教えてください！先輩達の仕事	2	2007年関西研修旅行報告	20
海外出張報告	8	短期大学部建設学科オリエンテーション報告	22
私と建築	12	山形のふたつのコンベ	23
新任非常勤講師紹介	14	教室ぶろむなード	24
平成18年度建築学科就職状況	16		